

# 漱石参

## 映画文学人生論

021) 彼岸過迄	夏目漱石	参考：彼岸花	小津安二郎
022) 行人	夏目漱石	参考：お茶漬の味	小津安二郎
023) ころ	夏目漱石	参考：ころ	市川崑
024) 道草	夏目漱石	参考：麦秋	小津安二郎
025) 明暗	夏目漱石	参考：早春	小津安二郎

則天去私——小我を去って、もっと大きな普遍的な大我の命ずるままに自分を生かす

夏目漱石の晩年の長編小説五篇をやっと読了した。『ころ』だけは若い頃、読んだことがあるが、それ以外ははじめてだ。

五篇ともいわゆる純文学の名作とされており、大衆文学、娯楽文学ないし通俗文学の小説ではない。市川崑監督の『ころ』をのぞく他の四篇は映画化もされていないようだ。

彼岸過迄	夏目漱石	彼岸花	小津安二郎
行人	夏目漱石	お茶漬の味	小津安二郎
ころ	夏目漱石	ころ	市川崑
道草	夏目漱石	麦秋	小津安二郎
明暗	夏目漱石	早春	小津安二郎

やむをえず、小津安二郎が『明暗』を読んだという日記の記述をたよりに藁をもつかむような気持で、小津の監督作品を参考作品として観たが、もちろん単なる思いつきにすぎない。小津映画が漱石文学に役立つわけがないが、なんとなく通底するところも若干あるような気がする。

鎌倉の円覚寺にある小津安二郎の墓は無の一字だという。晩年の夏目漱石が到達したという則天去私の境地に似ていると思う。いや、到達したというのは弟子たちが勝手につくった神話に過ぎない。



## 漱石参——映画文学人生論

いという批判もあるが、そのような批判者はたとえば江藤淳にしても柄谷行人にしても若いときの批判だ。死を意識する晩年になれば、無や則天去私の境地に近づくほうが自然ではなからうか。

弟子の一人で女婿の松岡譲『漱石先生』によれば、漱石曰く、「『則天去私』と自分ではよんでいるが、他の人がもっと外の言葉で言い表してもいるだろう。いわゆる小我を去って、もっと大きないわば普遍的な大我の命ずるままに自分をまかえるといったようなことなんだが、そんな言葉でいってしまったんでは尽くせない気がする」。

そして、『明暗』は則天去私の態度で書いており、近いうちにこういう態度でもって、新しい本当の文学論を大学あたりで講じてみたいという。

残念ながら、それが実現する前に漱石は他界してしまった。『明暗』は未完のまま絶筆となり、新しい文学論を講じる機会はなかった。享年は四十九だが、則天去私という言葉から連想するのは「五十にして天命を知る」（『論語』）だ。

私は五十歳のときは天命を知る境地にはほど遠かったが、二〇〇四年五月二十二日の夜、「祖父漱石——夏目房之助がたどる『猫』誕生百年——」という番組がNHK教育テレビで放映されたという。孫の房之助も『文学論』を読んでいると知って、なぜか天命のようなものを感じた。

董程な小さき人の孫の声